

神・身体を空間とらえた日本では最初の研究であり、日本の地理学に新しい見地を提案することができれば、本研究の意義につながる。

漆をめぐる地域間関係：  
長野県榑川村と中国湖北省

謝 陽

本論文は漆をめぐる、産出地と消費地の中国湖北省と長野県榑川村の関係を探ってみるものである。本研究を始めるきっかけは榑川村戦後から 80 年代にかけての日中友好関係への取り組みに引っかかり、漆貿易に注目したのである。本研究は木曾榑川村と中国湖北省の漆生産、貿易の地域調査を通して、歴史地理学の枠組みの中で、近代から 20 世紀 80 年代にかけ、中国と日本の漆貿易がどのように社会政治経済に影響され、また地域の変容に働きかけてきたのか、考察するつもりである。そのため、地域研究が論文の主体となる。その研究手法を徹底したフィールドワークに求める。本論文は地域の文献研究に加え、聞き取り調査を手法とする実証的な研究と位置づける。

第一章は漆の性質、採取及び漆樹の分布、植栽について、概観的に述べる。日本の漆植栽は個人によるものが少なく、ほとんど国によって保護、推奨されていた。しかも、その植栽の意味が時代に応じて変化していることである。

第二章は中国生漆輸入についての考察である。まず日本の中国産、ベトナム産漆の輸入史を述べ、中国湖北省恩施地区の生漆生産に焦点をあて、フィールドワークで聞き取った現状を説明する。そして、中国産漆が長い間湖北省の漢口という町を集散地とし、輸出貿易の変化はいかに戦争、日中関係などに影響されてきたか、文献や資料をもとに分析する。

第三章は長野県榑川村についてのフィールドワークを中心に展開し、木曾漆器の成り立

ちと生漆原料の使用状況を解明する一方、榑川村の満州開拓史及び戦後から 80 年代にかけての日中友好交流と生漆輸入促進運動との関係について論じてみる。

以上の調査を通して、文献の記述に基づき、まず近代から 20 世紀 80 年代にかけての漆貿易の変遷について大概がつかむことができる。外国産生漆輸入推移曲線が激しい起伏を呈しているといえる。戦前と戦後それぞれ二つのピークをもち、途中上ったり下がったり決して穏やかに発展してきたのではない。戦前ピークの形成は戦争の要因が大きく関わり、もう一つのピークは戦後地域産地振興に伴う需要量の増加によると考えている。産地別を見れば、中国産漆輸入のピークが 1930 年で、満州事変の前年だった。1931 年から中国国内に抗日運動が起こり、対日貿易額も落ち込んでいた。一方、中国産に次ぐベトナム産漆の推移曲線はピークが 1937 年で、前後の輸入量が中国産よりはるかに少なかったことが特徴である。そこで、ベトナム産漆が中国産漆の補充的な地位に当たると考えられよう。

戦前、生漆貿易が主に日本漆商の活躍によって活況を呈していた。明治から日本の海外進出に伴い、漆商が朝鮮、中国大陸、台湾、ベトナムなどで現地の生漆を買付、さらに朝鮮半島、台湾に植栽までも行った。戦時中、軍需用漆の消費が大きな割合を占め、漆貿易がだんだん国と軍の統制に取り込まれていった。戦後日中関係の複雑な変化の中、政治環境によって漆貿易が大きな揺れを示した。利益のため、漆商社と漆器産地の間に衝突が起き、従来の漆商による輸入ルートに不満を抱えた産地が自ら新たな生漆輸入ルートを探ってみた。その産地と中国の間に結ばれた輸入は民間の日中友好交流とは一体になって推進されてきた経緯がある。したがって、戦後の生漆貿易が戦前と比べ、産地の動向が目立ち、日中友好関係と結びつくことが特徴だといえよう。

漆器産地榎川村の積極的な活動は特殊で、長野県民の特質が働いているが、関わった人たちの多くが中国と何らかの関係を持ったことが明らかである。大衆的漆器を中心とするこの産地は戦前から漆器の輸出と中国産漆の使用で中国に対する認識が他の産地より高かった。村の主幹産業である漆器業に携わる人が多く、戦時中出征、満蒙開拓、商売などで中国に行き、生活した経験がある。それらの人たちは引き上げ後、漆器を作る傍ら日中友好交流にも熱心だった。そのような人によって作り上げた関係は産地の発展に欠かせないものであった。

榎川村と中国湖北省の関係は戦前直接的ではなかったが、当時の資料から見れば榎川村で使う漆には湖北省産出のものが多かったとうかがえる。両地域に関係が結ばれた理由は湖北省が大きな産地であるからのみでなく、長い間中国の漆の集散地として、漢口が重要な地位を占めていることにある。戦後、日中関係の非正常化、漆商社の一方的値上げに対する抗議の結果、榎川村と湖北省の間に直接的な貿易関係が結ばれた。これによって、二つの地域が再び緊密に関わるようになった。この時期、村長をはじめ村の指導者たちが頻繁に中国を訪れ、交易会、漆生産視察など多くの活動に取り組んでいた。一方、中国からも交流団体・個人が村に来て交流を行っていた。漆貿易を継続するには、人的往来、交流が大きな役割を果たしたとうかがえよう。

「見せ物の場所」から「生きられる空間」へ：  
中国・深圳のテーマパークをめぐる表象と実践

李 小妹

本研究では、中国の南部都市・深圳において、新しい都市空間が、社会的生産物としていかなる過程で作られているのかについて考察した。深圳は、1980年代以降、中

国の「改革開放」政策の下で、経済発展の「実験地」として作り上げられた新しい都市である。深圳はまた、香港に隣接するという地理的優越性のもとで、「経済特区」としてグローバル化の影響を受けてきた。こうして、中国の資本主義経済化とグローバル化がともに作り出した新しい都市として、深圳は、グローバル時代における中国都市の都市空間の変容と、都市空間を生きる人々とのかかわりのダイナミックな変容実態を、他のどの都市よりも先見的に、より良く反映している。

本稿は、深圳で文化観光施設として開発された「錦繡中華」、「中国民俗文化村」と「世界之窗」という中国最初の三つのテーマパークに焦点を当て、その建設経緯、展示内容と展示手法について検討したうえで、テーマパークを企画し建設した中国政府と資本家の側が、これらの空間を生産する際に、空間の利用者となる人々に、どのような経済政治的なメッセージを送ろうとしているのかを明確にした。本研究をなすにあたって、これらのテーマパークで2週間にわたってフィールドワークを行い、観光客やテーマパークで働く労働者など、テーマパークという空間に様々な形でかかわりを持つ人々に接近し、彼/彼女たちによる消費、利用、また生産といったあらゆる形をもったテーマパークとのかかわりのダイナミックな実態を観察した。そして、彼/彼女たちの活動によってテーマパークは、単なる「見せ物の場所」ではなく「生きられる空間」としても再生産されていることを確認した。

第1章では、本研究の問題関心と研究目的を明示したうえで、本研究に用いた三つの視点、すなわち、グローバル化、空間の生産及び空間のポリティックスについて述べ、また、先行研究の検討を通じて本稿の理論的枠組みについて紹介した。まず人間主義地理学を代表する中国系アメリカ人地理学者のトゥアンノ場所論、レルフの没場所性に関する理論を